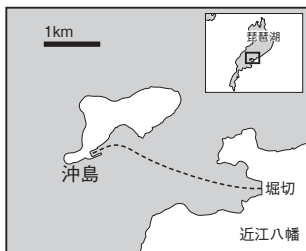


② 沖島おきしま（滋賀県近江八幡市）—— 沖島小学校

湖上の学校へ—— 定期船通学する二三人の子どもたち

近江八幡市立沖島小学校 校長 森本眞左子



沖島：琵琶湖の東岸、近江八幡市の沖合1.5kmにある面積1.52km²、周囲6.8kmの島。人口284人（平成28年8月末現在）。大半の住民が漁船を所有し、湖漁を営んでおり、琵琶湖の総漁獲量の約半分を占める。

● 日本でただ一つ湖に人が暮らす島

沖島は、日本でもっとも大きい湖である琵琶湖に浮かんでおり、淡水湖の有人島としては日本唯一、世界的にも珍しい島です。島の南側には、島の玄関である沖島漁港があり、沖島町自治会が運営する定期船が着岸します。郵便局やお寺、商店のほか、最近はカフェなどもあり、住民のほとんどは島の南側で生活しています。

簡単な買い物は、島内の商店を利用されていますが、各家庭で所有しておられる船のほか、定期船が一日一二往復しているのです。その船で対岸の堀切港に渡り、そこに置いてある家用車で、通勤や通学、買い物などをされるなど、暮らしはたいへん便利になっています。現在、人口は約二八〇

名で減少傾向にあり、高齢化率は五〇パーセントを超えています。高齡者がたいへん元気な島でもあります。

万葉集に沖島に関する歌が見受けられることや、縄文土器や和同開珎などが発見されていることから、かなり以前から沖島付近に人々の往来があったと言われています。

平成二五年には離島振興法の指定離島となり、島の振興をめざし、さまざまな取り組みが行われています。また、近年は観光客が急増しています。

● 沖島小学校のいま

沖島小学校は、眼前に琵琶湖を望み、教室はいずれもレイク・ビューとなっています。裏手には見景山けんけいやま（通称、ケンケン山）があり、春はワラビ、秋から冬にかけてはフユ



定期船は沖島町自治会が運営しており、児童の渡船費用は市の支援対象となっている。

イチゴなど、子どもたちは湖魚とともに山の恵みもたっぷり味わっています。

現在、全校児童は一五名。約一〇年前から小規模特認校の指定(※註)を受けており、近年は島外から通学する児童も増えました。平成二八年度は一三名が島外から定期船を利用して通学しています。特認校については、併設の沖島幼稚園も対象となっていることから、三歳児から小学校六年生までの通学・通園が可能となっています。定員はとくに設定されていません。

遡ってみると、この制度を利用して通学申請した児童は、平成二〇年度に一名、二三年度三名、二四年度一名、二五年度一名、二六年度三名、二七年度四名、二八年度五名となり、累計で一八名となります。いずれも、元気にほとんど休むことなく通学しています。

現在、市教育委員会が通学に伴う定期船やコミュニティバスの運賃にかかる支援などを行っています。また、自治会は通学児童の保護者の渡島に際して、割引運賃を適用してくださっています。さらに、定期船を利用する児童が増えたこともあり、学年に応じたサイズの児童用ライフジャケットも自治会によって整備されました。

五月と一〇月には年二回のオープンスクールを開催しています。今年一〇月のオープンスクールは、児童が企画・運営する予定です。沖島小学校の魅力を子どもたちの視点でいかに発信できるか、楽しみみです。

※註 小規模特認校指定の経緯…特定の地域での宅地開発などにより児童が急増し、過大規模校になりつつある一方、他の地域(市街化調整区域)では、児童数減少により小学校や幼稚園が小規模化し、学校の格差が生じてきた。こうしたなか、小学校・幼稚園における通学・通園区域のあり方の検討が必要となり、近江八幡市教育委員会から通学区域審議会へ諮問し、平成一八年九月に答申を受けた。沖島小学校については、全市からの通学を可能とする「小規模特認制度」の実施を検討する内容となっていたため、平成二〇年度から約四カ年弾力化試行を行い、同二四年度から本格実施し、現在に至っている。(近江八幡市教育委員会)

●地域に守られ、地域に支えられて

本校の児童は、明るく素直で何ごとにも真面目な態度で取り組むことができます。しかし、以前は大勢の前や初対面の人には自分の思いを十分に伝えられない児童が多かったようです。私たちはどんな人の前でも堂々と発表したり、自分の思いを伝えることができる児童を育てたいと考え、魅力ある沖島ならではの地域教材を活かした授業や、学習単元を貫く言語活動に重点を置いた授業、少人数の特性を

活かした授業づくりに取り組んでいます。そ



鮎寿司づくりの様子。本漬け作業(上)と鱗取り作業(下)。

の一部をここで、紹介します。

①遠泳大会

琵琶湖での遠泳大会は伝統行事の一つとなっています。学校のプールでは、「速く」ではなく、「長く」泳ぐ方法を丁寧に学習します。そして、各自が目標を決め、遠泳大会に臨みます。毎年、四年生以上の子どもたちは一〇〇メートル前後の距離を泳ぎ切ります。大会当日は、安全確保や応援、水分補給などのために地域の方が二艘の支援船を出してくださっています。

②ふるさと学習

沖島には伝統的な食文化が根付いています。地域の方を



琵琶湖での漁業体験。

講師に迎え、鮒^{かな}寿司をつくったり、山の恵みであるイバラ団子、フユイチゴのジャムなどをつくったりします。つくったものは、お世話になっていている地域の方を年二回お招きして、一緒に味わっていただいています。

とくに、鮒寿司づくりは生きたニゴロブナの鱗取りから始まり、塩漬け・本漬けのあと、水替えを二週間に一回程度つづけます。すべて子どもたちが世話をし、食するまで約九カ月近くかかりますが、貴重な学びにつながっています。

また、高学年の児童は、漁師さんの協力を得て、漁業体験をしています。魚の種類によって仕掛けが異なるため、島内の児童にとっても興味深い内容になっています。

③ 沖島太鼓

二〇年ほど前から「沖島太鼓」の練習を続け、夏祭りや文化祭など、地域の行事にて演奏しています。太鼓や衣装、その他備品などは自治会が支援してくださっています。

④ 定期船での避難訓練

定期船を利用して通学する児童が増えてきたことから、今年度は定期船での避難訓練を実施しました。救命胴衣を着て、指示に従って避難するという訓練ですが、船長のご厚意で定期船を沖合に出し、揺れた船内で避難訓練をすることができました。訓練中、何か異変があったのかと他の漁船が心配して近寄ってきてくださる場面もありました。

● 地域とともに

地域の方々といっしょに考え、取り組んでいく学習もしています。代表的なものは運動会です。自治会と合同の運動会は、他の学校とはまた違う内容で、学生ボランティアも加わり、沖島ならではのものとなっています。また、学校の隣にあるデイサービス施設「老喜^{おき}の里」との交流活動も行っています。施設の職員の方々にサポートしていただきながら、音楽演奏を聴いていただいたり一緒に遊んだりしています。

● 今年度、新たな取り組みを始めましたので、それらを紹介します。

① 特産品開発事業

市役所政策推進課を窓口、「沖島の特産品づくり」に参加しています。コーディネーターを中心



デイサービス施設「老喜の里」にて七夕飾りづくり。



「うみやまかわ新聞」の制作に取り組む子どもたち。

に年間四回の授業を通して、関係団体や関係企業と連携しながら特産品をつくりまします。七月に地域の関係者会議を開き、夏休み明けから早速授業が始まりました。どんな特産品ができあがるのか、楽しみです。

②「うみやまかわ新聞」の制作

日本財団と離島経済新聞社の支援で、「うみやまかわ新聞」の制作に取り組んでいます。沖島の良いところを子ども

の目を通して記事にし、発信します。スカイプと電子黒板を利用し、約四〇〇キロメートル離れた東京の事務局と沖島の教室をつないで学習を進めています。

③タブレットを活用した情報発信

滋賀県の小規模校における特色ある教育活動の指定を受け、自立学習（個に応じた内容やペースで、主体的に進められる学習法）をめざして、タブレットを活用した学習を始めています。さまざまなアプリを使った学習のほか、児童による情報発信も考えています。

●沖島教育の充実のために

島外児童が島内児童を上回っていますが、島の方々は温かいまなざしで登下校する子どもたちを見守ってくださいています。「子どもの声が聞こえること」が島の活気につながると受けとめてくださっている方も多いと思います。島の方々の継続的な支援をお願いするにあたり、沖島教育を充実・発展させていくことが、何より大切だと考えています。

森本眞左子（もりもと まさこ）

近江八幡市生まれ。沖島小学校校長。初任は2,000人を超える小学校に教諭として勤務。その後、大中小さまざまな規模の学校や市・県行政での勤務、教頭を経て、平成27年度より現職。僻地教育の活性化や地域を活かした教育を模索している。